

い」と述べ、^⑯ Pelliot氏も此の墓誌銘の文字について、此の字は漢字から發達したものであるから、九二〇年に作られた契丹の大字であつて、其の小字では無からう。小字は記録に依ると寧ろ回鶻字から發達したものでなければならぬと説いて居る。^⑰ しかしながら更に考へると、回鶻の言語や書を習つて發明した文字が、必ず回鶻字の形を有するものでなければならぬ理由はない、回鶻の音字を研究した結果、文字によつて只だ音韻を表出することだけを傳へたものと見れば、字體そのものは回鶻字に類しても、或は從來使用し馴れた漢字風のものであつたとしても、乃至全然此等と獨立した別個の形であつたとしても宜しい譯で、朝鮮の諺文の如きものゝ作出せられたことを考へて見れば、必しも此等諸氏の如く考へねばならぬ道理はない。殊に Marquart 氏の如きは、此の小字が、「數少而該貫」とあるのを説いて、「實に本文は其の文字が列に書かれ、^{リガツール} 連接の線で結び付けられたものであることを明らかに示してゐる (und zwar lässt der Text deutlich erkennen dass die Buchstaben desselben in Zeilen geschrieben und durch Ligaturen verbunden werden) と解し、これを以て漢字に倣つたものでないことの強い理由としたが、「該貫」の二字をかく解釋するのは當らない。尤もかく考へたのは、氏の註記する所によると、de Groot 氏が之を *alle aneinander gereicht* と譯したのに據つたのであるが、何人の解釋たるを問はず、斷じて誤である。此の一句の意味は、數は少いが、然もよく備はつて一貫して居るの義に解くべきこと疑無く、決して *ligatur* の事などをいふたものではない。然も數の少いといふことは、何に比べてかといへば、文勢の上から考へて、大字に比しての事と思はれる。大字は前記の五字から考へて見ても、全く漢字に倣ふたものに違ないから、無論其の數は多かつたと考へられるが、小字が之に比して其の數少しといふ以上は、何か文字構成の上に於て大字とは異り、